

脱肉体化時代の官能的思索 — ヴィレム・フルッサー論考 (5) —

越 智 和 弘

3. 『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』誕生の過程

脱肉体化時代からフルッサーへ

ヴィレム・フルッサーのもっとも謎めいた著作とされる『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』¹⁾に焦点を当て、フルッサーの思索内容が、なぜいまを生きるわれわれの心をとらえるのかを明らかにすべく、これまで四編の論文を公表してきた。²⁾しかしそこでは、フルッサーがいかなる理由から、*Vampyrotheuthis infernalis* という深海生物の視点からみた寓話という手法を選択するにいたったのかについての議論はおこなわなかった。理由は、20世紀後半期の西欧が、〈脱肉体化された時代〉へと移行した過程を解き明かす作業を過去に進めてきた³⁾ことの必然的結果として、フルッサーの思索に、そして『ヴァンピュロトイティス・…』に行き当たったことにある。その出会いがあまりにも衝撃的であったがゆえに、ヴァンピュロトイティスとはなにものか、またフルッサーとはそもそもどのような人物なのかを探ることに、これまで考察の大半が費やされてきた。しかし、われわれが生きる時代を読み解くうえで、フルッサーが残した仕事が比類なき価値をもつ理由を明らかにするには、ここでフルッサーとその著作の評価からいったん離れ、フルッサー自身を『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』へと駆り立てた心的過程を探る段階にいたったように思われる。

『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』を理解するうえで立ちふさがる最大の謎は、なぜ深海軟体動物を主人公とする寓話形式を選んだのかという疑問である。この著作をフィクション、すなわち「文学」だと言い切ってしまうには多少の勇気を要するが、じっさいにそうである理由を、フルッサーみずからが『ヴァンピュロトイティス・…』のなかで、つぎのように明かしている。

ここに意図されるのは、科学的論文ではなく、ひとつの寓話である。そこでは、脊椎動物である人間の現存在が、軟体動物の立場から批判されることになる。寓話の大半がそうであるように、ここでも外見的には動物のことが話題にされている。*De te fabula narratur.* (しかし語られているのは、あなたたちのことなのだ)。⁴⁾

とはいえ現時点においてはまだ、なぜフルッサーが、軟体動物の世界を借りて、西欧近代を批判する寓話を書かねばならなかったのか、納得のいく答はみいだせていない。加えて断っておかねばならないことは、『ヴァンピュロトイティス…』を実際に開いてみた読者の大半は、これが「寓話」だとは見抜けない、と思われることである。少なくともその前半部は、純粋に生物学的な論考であるかのごとき印象を与える。現在ベルリン芸術大学に設置されているヴィレム・フルッサー・アルヒーフで近年発見されたブラジル・ポルトガル語による未発表原稿をもとに、2011年に刊行された英語版『ヴァンピュロトイティス…』の前書きにおいて、翻訳者ロドリゴ・マルテズ・ノヴァエスは、この著作を、はたして「純粋に科学的な論文として、もしくは哲学的なフィクション」⁵⁾として訳すべきか、頭を悩まされたと証言している。いうまでもないことながら、これは翻訳する側にとっては重大な問題である。なぜなら、どちらにみなすかによって、そこから生まれる文体が、フルッサーのこの生物との向き合い方を決定づけてしまうからである。結局、さまざまな検討をくわえた結果、ノヴァエスが下した結論は、「このテキストは、純粋な科学的論文だとも哲学的なフィクションだともいえない。なぜならそれは、その両方だからだ」⁶⁾というものであった。

ノヴァエスは、フルッサーが『ヴァンピュロトイティス…』に先立って上梓した『歴史後の世界』もまた、そのブラジル・ポルトガル語原稿からの英語訳を2013年⁷⁾に刊行している。その冒頭でノヴァエスは、フルッサーが『歴史後の世界』を完結した後、間をおかずに『ヴァンピュロトイティス…』の執筆に取りかかった経緯について、つぎのように解説している。

『歴史後の世界』の原稿完成後間をおかず、フルッサーは、のちにかれのもっともエキセントリックな書となる『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』に取りかかっている。この著作にもまた、ドイツ語とポルトガル語による、明らかに異なる二つのバージョンが存在した。それは、人間的理性とヴァンピュロトイティス的性愛を統合した、人間性の新しいモデルを模索することに焦点を当てるものであった。⁸⁾

フルッサー自身も、1983年にブラジル・ポルトガル語で出版した『歴史後の世界』の結末部において、つぎに取り組むべき課題について、興味深い予告を行っている。それは、現在ますますわれわれを絶望の淵に追いやりつつある「歴史後の世界」のなかで、人間がやがて、アルゴリズムに支配されるロボットと化すのを避けるために執りうる唯一の戦略は、「他者 (the Other) の内部にひそむわれわれに心を開くことなのだ」⁹⁾と述べている点である。もはや社会にリンクすることをやめ、自己を孤独のなかにおき、愛

に心を開放し、大文字の他者、すなわちあらゆる言語化を逃れる場で機能する官能の世界で遊ぶこと、つまり「秘めやかな陰門をとおして」¹⁰⁾こそ、機械による支配から逃れ、神のイメージにふたたび接近しうる唯一の可能性がみいだせる、というのである。それによって、「異化された象徴的世界を粉碎し、われわれ自身の死を具体的に体験しうる場として他者のなかに立ち戻ること、要するに人間性を取り戻す」¹¹⁾ことこそが、いま求められているのだ、ということばで『歴史後の世界』は締めくくられていた。

ここで『歴史後の世界』について、それが書かれた言語と出版年を整理しておく必要があるだろう。この書は、まず1983年にブラジル・ポルトガル語により *Pós-História – Vinte instantâneos e um modo de usar* として出版されている。ちなみに1983年は、『写真の哲学のために』がドイツにおいて出版されたことにより、フルッサーの名が初めてヨーロッパで広く知られる契機をなした年である。¹²⁾ 加えてフルッサーの著作全般にわたっていえることは、かれの著作は原稿としては早く完成していながら、一部の著書を除けば、実際に刊行されたのが、1991年のかれの死後である場合が多いことである。『歴史後の世界』にしても、ブラジル・ポルトガル語版は、1983年に発表されたものの、欧米ではほとんど注目されず、それが広く知られるようになるのは、1997年にドイツ語版『歴史後の世界—ある修正された歴史記述』が刊行されてからのことである。

さらにフルッサーは、自著をみずからの手で別の言語に翻訳する作業をとおし、思索を深めていくというユニークな手法をとった点においても注目される。当初はポルトガル語とドイツ語とのあいだの相互変換から始められたこの手法は、とりわけ70年代にヨーロッパに居を移して以降は、さらに多言語化する。『歴史後の世界』の原稿を例にみると、これまでドイツ語版(2ヴァージョン)、ブラジル・ポルトガル語版(2バージョン)、フランス語版(一部)、英語版(一部)の存在が確認されている。¹³⁾

ブラジル・ポルトガル語から英訳された『歴史後の世界』の結末部を、そのドイツ語版と比べると、先に紹介した『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』の内容を予告する文章が、ドイツ語版においてはほぼ欠落していることがわかる。¹⁴⁾ だが、英語版とドイツ語版とのあいだの違いを考えるまえに、むしろその共通項として注目せねばならないのは、どちらの版においてもフルッサーは、『歴史後の世界』において西欧近代が宿命的にかかえることとなった絶望的な危機を回避するために、「他者」への強い期待を表明していることである。それは、英語版では、「われわれは、他者のなかに自己を認めることに心を開いている」と述べたうえで、「西欧人は、ある意味で二重に否定的であるがゆえに、愛に心を開くことによって、愛が *omnia vincit* (すべてに勝利するであろう)」¹⁵⁾ ということばで語られ、ドイツ語版の該当箇所をみると、それは、「愛する能力、他者のなかにみずからを認める能力、さらには他者(の存在)を認められる能力のなかに、現存在 *Dasein* の具体的な基盤を再発見しうるすき間をみいだすことで、そこに

撤退することが可能となるのである」¹⁶⁾と語られている。ドイツ語版ではさらに、「人間は、その場所においてこそ、愛が死を凌駕する体験ができるのだ」¹⁷⁾というくだりがつづいている。

では、ここでいわれる「他者」とは、そもそもだれを指すのか。そして、西欧人が愛にたいし「二重に否定的」であるとは、どういう意味なのか。おそらくその答をみいだすことが、フルッサーが『ヴァンピュロトイティス…』を書くにいたった理由と密接に結びついているように思える。しかしそのまえにまず、フルッサーが選択した手法が、文学（＝寓話）でなければならなかった理由を明らかにするために、ひとつ重要な寄り道をおかねばならない。それは、「ヘクトコテュルス」Hektokotylus というタコの生殖行為からヒントをえた文学的手法についてである。

ヘクトコテュルス

この奇妙な名をもつ文学的手法について、おそらく初めて言及したのは、68年世代のドイツ文学者クラウス・テーヴェライトであろう。かれは、アルノ・シュミットの小説『ポカホントスとめぐる湖の風景』¹⁸⁾を分析する際に、一見平凡で日常的な描写のなかに、地理的にも時間的にも隔たったさまざまな情景が重なりあって織り込まれていることを現出させるために、この戦後ドイツの作家がとったユニークな方法論を、「ヘクトコテュルスする」hektokotylisierenと表現したのである。一般には耳慣れないこの用語は、タコやイカなどの軟体動物がもつ、精液を溜める袋をそなえた雄の触覚の先端部を意味する。雄はこのヘクトコテュルスを、雌の膈内に挿入することで生殖行為をおこなうのである。よってhektokotylisierenは、雄が精液の溜まった触覚を雌の体内に送り込む行為を指す動詞である。¹⁹⁾そのさい、テーヴェライトが文学的手法との関連で着目するのは、雌の体内に挿入されたヘクトコテュルスが、多くの場合ちぎれて雌の体内に残ってしまう事実である。これは他者を自己の体内に取り込んだうえで、それを体内の一部にしてしまうことを意味する。テーヴェライトは、シュミットが小説『ポカホントス…』でとった手法が、地理的にも時代的にも大きく隔たったさまざまな出来事を、多層的にひとつの作品のなかに取り込むことで作品の一部としてしまうこと、つまりまさにhektokotylisierenする行為であったことを、著書『“You give me fever”』のなかで、詳しく分析している。ここでは、この前代未聞な文学手法についての、テーヴェライトの定義を確認しておこう。

ヘクトコテュルス：それは、イカ・タコ（およびその他の軟体動物）に備わる触腕のことであり、雄はそこに溜まった精液を雌の外套腔に注ぎ込む。その際、ちょうどアルゴナウタ・アルゴ種 Argonauta argo²⁰⁾、ドイツ語の学名が Papierboot 「紙の

舟」と呼ばれるタコ種において起きるように、多くの場合、触腕はちぎれて、雌の体内に残ってしまう。シュミットは、自身がちょうど「紙の舟」の乗組員になったかのごとく、ヘクトコテュルスが起きる行程を、紙のうえに書く行為によって呼び寄せるのである。そのさい触腕をなすのは作家ではなく、その逆である。つまりかれは、他の書物の断片を自身の「外套腔」にヘクトコテュルスすることで、本の受胎を引き起こし一つまりかれの書く本は雌なのだ！—そこから新たな本の部分を生み出すのである。そうすると、イカであり軟体動物に見立てられる作家は、世界中の本にそなわる受精能力をもつ触腕の収集家として規定されることになり、そのなかで作家自身はゆっくりと「溶解」していくのである。²¹⁾

テーヴェライトは、アルゴナウタ・アルゴという八本足のイカに属する軟体動物が、生殖行為をおこなうさいに、雄の触覚の先端部にある精液を溜めた袋が雌の外套腔内で食いちぎられ、雌の体内に残される性格と、この軟体動物の学名が、黄金の羊毛皮を求めて航海したギリシア神話に登場する大型船アルゴ号 *Argo* とその乗組員 *Argonaut* にちなんで名づけられていることを結びつけ、さらには同じ生物のドイツ語学名が、偶然にも「紙の舟」*Papierboot* であることから、文筆活動を想起させることとも関連づけることで、シュミットのとった文学的手法の特異性を説明しようとしているのである。

テーヴェライトが上記の引用のなかで、シュミットがとった文学的手法は、「イカであり軟体動物」のそれであり、作品は、さまざまな言説の断片（雄の触腕）を作品の「体内」に取り込み、それらすべてを自己の一部として表現する「雌」なのだ、と述べていることは、フルッサーが題材として選択した *Vampyroteuthis infernalis* もまた、ヘクトコテュルスする「イカであり軟体動物」であることと強く共鳴する。さらにシュミットがとった文学的手法には、いまひとつ重要な利点が秘められていることをテーヴェライトは指摘する。それは、多層性の同時的表記、すなわち写真技術にある多重露光に似た効果を、文学ならではの方法によって表現していることである。

シュミットの手法は、「平面上の同時性」や「さまざまなことを一挙に語る」ことを遙かに超えている。つまりかれは層 *Schichten* 重ね合わせて書くのである。話＝歴史 *Geschichte* のさまざまな層 *Geschichts-Schichten* は重なり合い、それらがつねに更新される多重露光によって、画家が絵を重ね塗りする場合とは異なり、重なり合った層はそれぞれが「可視」なまま残るのである、いやそれ以上に、層と層はたがいに照らしあうのである。²²⁾

ひとつの作品のなかに、地理的にも時代的に異なる言説内容が層をなして重ね合わさ

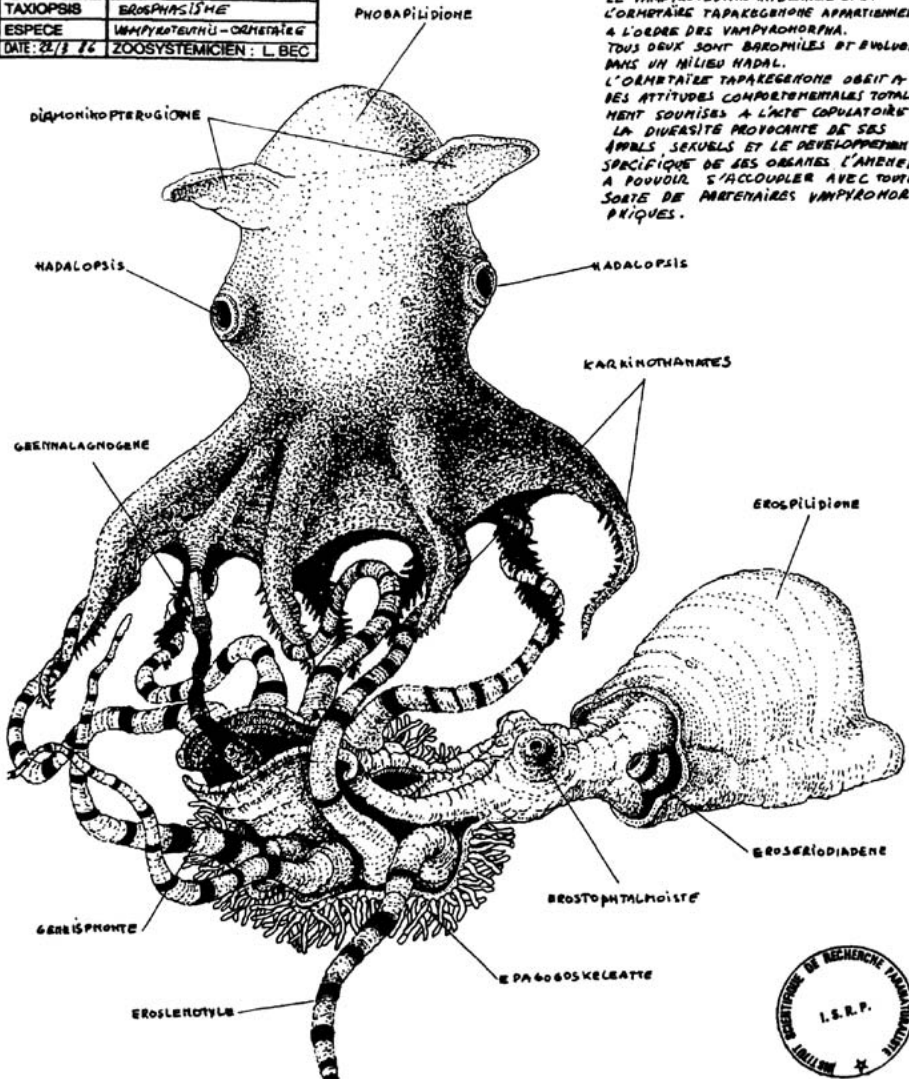
りながら、それらはつねに可視化されているだけでなく、同時にたがいを照らし合うことで、読者の脳裏に強く焼きつけられる。重要なのは、そのさい歴史的因果関係は考慮されないどころか、読者の意識にさえのぼらないことである。先になって論じることをここですこし先取りしていえば、フルッサー哲学がもつ比類なき斬新さは、西欧近代のもつ文字文化を偏重する直線的思考を批判し、人類がいまや直線的思考から、時間的制約を超越した図像的思考へと移行する段階に達しつつあることを喝破したことにこそみいだせる。たがいに矛盾する要素を複層的に、つまりそれぞれが可視性を失うことなくヘクトコテュルスする母体として、ヴァンピュロトイティスにかれが惹かれた理由は、そこに西欧の直線的思考を超克しうる可能性を見いだしたからではないだろうか。ただそれを「哲学的」に論じようとするれば、ふたたび直線的思考に回帰せざるをえなくなる。『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』が一見科学的な形体を呈しながら、寓話というフィクティブな形式で書かれた理由はまさにその点にあったように思われる。そのさい「地獄の吸血コウモリ」という想像力をかき立てる学名をもつ軟体動物は、図像的多層性を表現するうえで格好の主人公となりうる。思い起こせば、*Vampyroteuthis infernalis* は、触覚全体にペニスとクリトリスの備わった存在²³⁾だと、フルッサーは述べていた。さらに、三つの異なるペニスをそなえているとされる雄の性器の機能をみると、ひとつは、たしかにヘクトコテュルスする役を果たしながら、残る二つのペニスは、官能性を極端に高めながら世界を把握するための触覚だと説明されている。

生殖器官は、われわれに「奇異な不快感をもたらす」ものである。雌は雄よりからだが大い。雌の卵巣は、腹部と外套膜とのあいだに位置する“Genital-Coelum”と名づけられた付随的な腔のなかにある。雄は、異なる機能をもつ三つのペニスを使い分けることができる。本物のペニスは、精包を備えた柔軟性のある管状で、雄はそれを雌の腔のなかに挿入する。雌の体内でペニスの先端部は切り離され、卵巣の奥へと入りこみ、精液を排出したらそこで死に絶える。雄のペニスの先端部は、性交のたびに再生される。ふたつ目のさじ状のペニスは、メスの歯のあいだから覗く舌をなでることで、雌を興奮させ、それによって分泌する特殊なホルモンが卵巣に流れ込む。三つ目の親指のかたちをしたペニスは、交尾のあいだ雌の腹部をさすりつづける。三つ目のペニスの生理学的な機能についてはいまだ不明である。ただ、それは交尾とは別に、周囲の世界を触覚で感知することに貢献している。それは、ちょうどわれわれ人間が、世界をペニスによって把握するかのごとくである。²⁴⁾

ちなみに、『ヴァンピュロトイティス…』の共著者として本の末尾に数々の図版（作品）を提供しているフランスの現代アーティスト、ルイ・バックの *Vampyroteuthis infernalis*

INSTITUT SCIENTIFIQUE DE RECHERCHE PARAMURALISTE		
V	upokrinomenes	10
	MONOGRAPHIE	
TAXONOMIE	AIRES HYPOCRISIQUES	
PRODOTIQUE	upokrimenologie	
ZOOTOPIE	HADAL	
TAXIOPSIS	EROSPHASISME	
ESPECE	VAMPYROTEUTHIS-ORMETAIRE G.	
DATE: 23/3 86	ZOOSYSTEMICIEN: L. BEC	

VAMPYROTEUTHIS INFERNALIS G.
ORMETAIRE TAPAKEGENONE



LE VAMPYROTEUTHIS INFERNALIS G. ET L'ORMETAIRE TAPAKEGENONE APPARTIENNENT A L'ORDRE DES VAMPYRODORFNA. TOUTS DEUX SONT BAROPHILES ET EVOLUENT DANS UN MILIEU HADAL. L'ORMETAIRE TAPAKEGENONE OBEIT A DES ATTITUDES COMPORTEMENTALES TOTALEMENT SOUMISES A L'ACTE COPULATOIRE. LA DIVERSITE PROVOCANTE DE SES APPALS, SEXUELS ET LE DEVELOPPEMENT SPECIFIQUE DE SES ORGANES L'AMENENT A POUVOIR S'ACCOUPLER AVEC TOUTE SORTIE DE PARTENAIRES VAMPYRODORFRIQUES.

Louis Bec, *Vampyroteuthis infernalis* (Courtesy of Vilém Flusser Archiv, Universität der Künste Berlin)

と名打たれた作品を眺めると、そこでは、雌よりも明らかに体の小さい雄が、まさにヘクトコテュルスしている様子が描かれているのではないか。

巨大な蛸やイカは、西欧近代においては、つねに「女性的他者」にたいする「密かな好みや、一方的な思い込みを生みだしたがる執拗な傾向を不意に呼び覚ます」²⁵⁾ 表象でありつづけたと、ロジェ・カイヨワは証言していた。それは、19世紀以降にいたっても、依然としてつきつきと明らかになる科学的事実と反発するかのごとく「神話」を生みだしつづけた。²⁶⁾ フルッサーは、西欧近代が行きついた先として文字文化による直線的な歴史の時代が終焉を迎え、代わってビット（ピクセル）による図像的アルゴリズムが人間を支配する図像の時代が不可避的に到来しつつある確信をえとうえで、一方では非西欧的でありながら、同時にじつは、西欧にも過去に存在していながら、近代がいわば置き去りにしてきた「他者性」を強く意識したことが想像される。この二重に否定された他者性について、つぎに考えてみたい。

新たな課題の発見

『歴史後の世界』からほぼ間をあげずに、フルッサーが『ヴァンピュロトイティス…』に取りかかった経緯を、時系列から確認しておきたい。『歴史後の世界』のドイツ語版は、1980年3月に脱稿している。（出版されたのは1990年）²⁷⁾ 同年12月には、そのポルトガル語版が書き終えられ、1983年に、先に完成していたドイツ語版より早くブラジルで出版されたことは、すでに確認した。（本論99頁）ポルトガル語版が脱稿した12月の翌月、すなわち1981年1月にフルッサーは南米からヨーロッパに移住する決心を固め、フランス南部の村ロビオンに新たな居住地を構えるやいなや、『ヴァンピュロトイティス…』の原稿に取りかかっている。²⁸⁾ かれがそれを一刻も早く仕上げたい気持ちに駆られていたことは、同年9月には、つまりわずか8ヶ月ほどで、それもドイツ語版とポルトガル語版の二つの原稿が同時に脱稿されていることから裏づけられる。さらに間をあけることなく、同書のフランス語版と英語版の執筆がはじまっている。

すでにみたように、フルッサーは、『歴史後の世界』によって、西欧が16世紀以降の近代的道程をへて、20世紀後半期に絶望的な危機に陥った状況を、ひとまず描ききったといえる。しかし、その結果判明した絶望感に打ちのめされそうな地点に立ったうえで、なおかつフルッサーは、この絶望的情况から西欧が脱しうる可能性を示す必要性を痛感したことが想像される。西欧近代が、どうみても絶望的な状況にあることをけっして軽んじることなく認識したうえで、しかしそこからみいだしうる将来への展望が、いくら危険に満ちていようと、そこに、人間が人間としてあるべき姿にふたたび回帰しうる一抹の光をみだし、それに身をまかせること、もはやそれしか人類を救いうる道がないことを、西欧人に理解させることが、フルッサーが『歴史後の世界』を書き終えた直

後から、みずからの責務として強く認識したのではなからうか。

フルッサーは、『歴史後の世界』の結末部において、つぎに取り組みねばならないことは、過去5世紀わたる発展史のなかで西欧近代にもっとも欠けていた部分、すなわち労働意欲の産出を最優先させてきた結果、抑圧せざるをえなかった性愛の世界を、他者の視点をとおし再発見することだと述べていた。つまりこの、西欧とは決定的に異なる世界のなかに入りこむことで、そこに身をおいた視点から、官能性の抑圧という、西欧近代が宿命的にかかえた欠点を洗い直すことが、『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』に託された課題だった、とひとまずいえそうである。ただし、フルッサーが意図したのは、西欧人みずからが文化的危機を認識したさいに再三おこなってきたような、性を邪悪視しない東洋的世界観を吸収し模倣することではない。なぜならこうした試みは、一部の西欧人の自己満足に終始せざるをえないもので、西欧を真に変革するうえで効果がないことは重々認識されていたからである。では、どうすれば西欧人に、西欧近代が置き忘れてきたものを、たんなる異文化知識としてではなく、「自己のなかに」生きたものとして意識化させるのか。

じつは、刊行された著作としては最初のものとなる『悪魔の歴史』²⁹⁾の「性欲」die Wollustと題された第2章なかで、すでにフルッサーは、西欧人にとっての異文化を真に内面化するうえでの不可能性について語っている。一般に東洋に特有な世界観だとみられがちな、人生を流動的なものとみなす考え方は、じつは西欧人にとってもなじみのないものではなかった。サムサーラ（輪廻）思想、あるいは、いのちを川の流れるのごとく、取るに足らない幻想とみなす考えは、西欧の歴史のなかでも、神的なものと悪魔的なものとを等価的相関関係としてとらえる古代の伝統のなかに現れている。しかし現代の西欧人は、それを正統な見方として暗示することはないし、まして口にすることは絶対になりえないという。³⁰⁾ それはなぜか？

なぜなら、循環する水のたとえは、われわれの西欧において、一方ではありきたりなものでありながら、そこには意味の過給現象が起きているからである。われわれのあいだでは、そうしたことを本当の意味で最後まで考え尽くしたのは東洋だと思いつきたい意志がはたらいている。われわれ西欧人にとっては、人生を、流れる液体のごとくとらえる考えは、たしかに頭で理解しうる概念ではある。われわれは、人生の過程がひとつの統一性をもちながら、同時に個々に生きるものが液体のごとき無常性のなかにおかれていることを、表層的には知っている。しかしわれわれは、個人の個別性を絶対視する殻のなかに閉じこもりすぎるあまり、すでに十分知りえている事実をみずから体験することができないのである。われわれは、人生を川の流れるようにとらえる考え方を、口先では褒めそやす。しかし実際には、それに身

をまかせる気もなければ、そういう能力も持ち合わせていないのである。³¹⁾

『悪魔の歴史』において、すでに上記のごとく認識されていたこと、つまり、西欧人が、知識としては十分に知りえていながら、「個」への執着心があまりに強いがゆえに、その殻を破って異文化の世界に身を投じることができない問題への解決策をみいだすことが、西欧近代の絶望的な危機を描ききったあとの、フルッサーの課題となったのであろう。ただそれを効果的に達成するためには、これまでとってきた哲学的論述とは異なる戦略を考案せねばならなかった。そこでかれがなによりも必要としたのは、おそらくかつてアリストテレスが「思索」への源泉とみなした「驚異」せしめるもの³²⁾ではなかっただろうか。「驚異」こそが、人びとを慣れ親しんだ日常の世界から引きはがし、身近にありながら忘れ去られてきたもの、すなわち「異常なもの」*das Ungewohnte*を再認識させる効果をもつことについては、ハイデッガーも認めており、かれは、その引き金を引く唯一的な領域を担うのがまさに「芸術」だと位置づけ、その重要性を強調していた。

われわれに自然なものとして現れるものは、おそらくは、ただ長い間の習慣から生れた通常のものにすぎないのだろう。長い間の習慣は、通常となったものの起因をなすあの異常なもの (*das Ungewohnte*) を忘却させてしまうのである。けれども、異常なものは、かつては奇異の念をいだかせるものとして、人間に襲い掛かり、その思索を驚異 (*Erstaunen*) せしめたのだった。³³⁾

芸術が果たすこのうえなく重要な機能を言い当てた上記のハイデッガーの洞察は、フルッサーがまさに、西欧近代の危機的状況を描ききったあとにいただいたであろう認識と重なる。つまり、かれにとって必要だったのは、人びとを圧倒的なまでに驚異せしめると同時に、その抽象化にも貢献しうる〈芸術的な〉、つまりフィクティヴな存在であった。それは実在と架空、つまり科学と虚構のちょうど中間に位置していることが望ましく、西欧人の関心を強烈に引きつけるものでありながら、みる人や立場から多層的な解釈の可能性を付与しうる存在でなければならなかった。求められたのは、実在と虚構のあいだを自在に行き来しながら、同時に多層的な意味を発光させること、つまり、さまざま異なるフィクティヴな視点を、ちょうど写真の多重露光のように、一つの表象のなかに重ね合わせてとりこめる、まさに「ヘクトコテュルス」する存在なのであった。

フルッサーが『ヴァンピュロトイティス…』を書くにあたって、寓話という文学的形式を選択した理由を知るうえで、かれがザンクト・ガレン大学教授のフェリックス・フィリップ・インゴルトに宛てた手紙は、重要な示唆を与えてくれる。フルッサー・ア

ルヒーフのダニエル・イルガングの調査によると、フルッサーとインゴルトのあいだでは、1981年から10年近くにわたり書簡が交わされている。インゴルトが1981年の3月末か4月初頭にフルッサー宛に初めて一枚の絵はがきを送ったのは、まさに『ヴァンピュロトイティス…』執筆真最中の時期であった。その後二人のあいだでは、100通ほどの書簡が交わされており、それらはフルッサー晩年の思考の変遷を知るうえで重要な資料をなしている。³⁴⁾ フルッサーにとって、インゴルトから寄せられる意見や批判がみずからの思索を展開するうえで重要な意味をもっていたことは、フルッサーが1986年2月13日付でインゴルトに宛てて送った手紙のなかで、「あなたと意見を交わすことは、私にとって不可欠な仕事の支えになっています」³⁵⁾と書き送っていることからもうかがえる。

フルッサーは、1981年から82年にかけて、インゴルト宛てにくり返し『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』についての構想を書き送っている。そのなかでフルッサーは、「寓話的な思考」がもつ重要性について、つぎのように説明している。

私は、「寓話的な」思考がもつ問題にますます本格的に興味を抱くようになってきました。たとえば、サイエンス・フィクションと虚構にもとづく科学の違いは何なのでしょう？はたしてニュートンは「仮説はフィクションではない」*hypotheses non fingo* という文によってなにを言わんとしていたのか？ひと言でいえば、仮説と寓話を区別するものは何なのか？類似性への疑問を、反転させた視点から発してみること。³⁶⁾

数年後、フルッサーはインゴルトに宛てた手紙のなかで、「フィクション」について、「フィクション：それは虚偽という迂回路を経由した真理への模索」³⁷⁾と定義している。これに応じてインゴルトは、「寓話」という文学的形態をさらに発展させるべきだ、とフルッサーを励ましている。³⁸⁾

しかし、フルッサーが *Vampyroteuthis infernalis* という生物を格好の対象として選びだした理由は、たんに文化的に異なる視点から西欧近代を批判することにとどまるとは考えられない。なぜならその課題は、ある意味で『歴史後の世界』において、すでに果たされていたからである。そこで果たしえなかったことは、絶望で窒息しそうになる近代の閉塞感のなかから新たな展望を提示することであった。そのための最大の障壁をフルッサーは、西欧人が、性愛にたいし「二重の意味で否定的であった」³⁹⁾ことにみいだした。では西欧人はいかなる意味で、性愛にたいし「二重に否定的」であったのか。〈二重の否定性〉が謂わんとしていたのは、ひとつには、西欧以外の文化が概してもつ性愛を貴重なもののみならず姿勢にたいし、理性にしがみつくと西欧的個人が、性にたいし一貫して禁

欲的で抑圧的な態度を示してきたことであろう。ただそれだけでない。同時にかれが看破したふたつ目の否定性は、じつは西欧人自身のなかにかつては存在していた、性愛をめぐる矛盾をそれとして受け入れる姿勢の否定のことである。

この推測は、フルッサーが1978年から1979年にかけて、友人アレックス・ブロッホ宛に送った二通の手紙によっても裏づけられる。その一通目、1978年10月12日付で送られた手紙は、東洋と西洋がけっしてたがいに理解できないことを意味する *never the twain shall meet* ということわざから始まっている。そこでフルッサーは、ヴィルヘルム・ライヒに代表される性愛をめぐる西欧ヒッピー文化と日本や中国の仏教性とのあいだの理解不可能性について語っている。⁴⁰⁾ そして、1979年1月4日付の手紙では、古代ギリシア神話の世界において、理性 *nous* (*Vernunft*) が、策略や悪巧み *die List* を体現するメティス *Metis* と、知恵、英知 *die Weisheit* を体現するソフィア *Sophia* という性格の矛盾する二人の女神によって体現されていたことが詳しく説明されている。⁴¹⁾

これらほぼ立てつづけに送られた2通の手紙は、フルッサーが『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』の構想について語る、1981年3月7日付のブロッホ宛に手紙⁴²⁾ に先立つものとして注目される。つまり、これら手紙の流れからみると、フルッサーは、たんに東方文化に育まれた性愛への寛容性を描きだしたかったのではないことがわかる。なぜならそれは、*never the twain shall meet* ということばが言いあらわしているように、西欧人がいくらそうしたくても実現できることではないことに、フルッサーは重々気づいていたからである。したがって一方では性愛を中心に据えた「驚異せしめる」官能的世界を現出させつつも、じつはそれが、西洋文化の内部においてもかつては存在した伝統があることを示すことこそが、フルッサーが果たそうとした課題であったと考えられる。悪を是が非でも排除しなければならぬとみなすのではなく、悪は悪でありながら、善と同じく人間の生活にとり不可欠であることを認める伝統が、じつは西欧にもかつては存在していた。にもかかわらず、西欧近代は、矛盾を矛盾として受け入れることを拒絶し、性愛を邪悪と決めつけ、その抑圧と排除に終始してきたのであり、まさにそのことにおいてこそ、西欧的理性が陥った絶望的な危機の原因がある、とフルッサーは見抜いたのではなかろうか。

問題となるのは、この構想、つまり「二重の否定」のなかにおかれてきた西欧近代を浮き彫りにし、人びとに認識させるためにいかなる戦略をとるべきかである。思い起こしてみよう。フルッサーはそれを、「大文字の他者 (= 女性的他者) の機能のなかに入りこんで遊ぶこと、それによってみずからがロボット化されることから逃れ、ふたたび〈神のイメージ〉となりうるのだ、つまり、秘めやかな陰門をとおして *through the back door*」⁴³⁾ と述べていたではないか。つぎなる課題として認識された「女性的他者の機能のなかにもみずから入りこむ」こととそこで「遊ぶこと」ことは、どうみても哲学的な論

文によっては実現しえない。それは、まさにみずからが「ヘクトコテュルス」と化して女性的他者の子宮内に入りこみ、そこで遊ぶこと、すなわち、たがいに矛盾する要素を作品＝雌の体内に取り込むことで新たな生命を誕生させることで「驚異」を呼び覚ますという、まさに文学的行為をさしおいては考えられなかったのである。

註

- 1) 本考察においては、フルッサーの著作名との混同を避けるため、著作名は『ヴァンピュロトイティス・インフルナリス』、生物そのものを指す場合は、*Vampyrotheuthis infernalis* という表記を一貫してもちいる。
- 2) 本論文を含む、これまで公表した下記の論文4編は、すべて科学研究費〔基盤研究 (C) 課題番号:26370163〕の助成による研究成果である。：越智和弘、「脱肉体化時代の官能的思索－ヴィレム・フルッサー論考 (1)－」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)『言語文化論集』第36巻第1号 (2014)、15－30頁、Kazuhiro Ochi, *Vampyrotheuthis in der desexualisierten Welt – Studie zu Vilém Flusser (1) –*, *Studies in Language and Culture Vol.36 Nr.2*, Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University 2015, S.23-45、越智和弘、「脱肉体化時代の官能的思索－ヴィレム・フルッサー論考 (3)－」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)『言語文化論集』第37巻第1号 (2015)、15-30頁、越智和弘、「脱肉体化時代の官能的思索－ヴィレム・フルッサー論考 (4)－」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)『言語文化論集』第37巻第2号 (2016)、33-48頁。
- 3) この考察過程については、科学研究費〔基盤研究 (C) 課題番号:23520166〕の助成による研究成果として、「労働力均質化時代の性と文化」の題目のもと、『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)第33巻第1巻 (2011)～第35巻第2巻 (2013)に発表された6編の論文において詳細に論じた。
- 4) Vilém Flusser/Louis Bec, *Vampyrotheuthis Infernalis – Eine Abhandlung samt Befund des Institut Scientifique de Recherche Paranaturaliste*, Göttingen 1987/2002, p.13. 引用文の最後にあるラテン語は、古代ローマの詩人ホラティウス Horatius/Horaz の詩『諷刺詩1』からの有名なことば。fabula=Gerede, Erzählung であることから、ドイツ語にすれば Die Geschichte hat etwas mit dir zu tun. (Du bist damit gemeint.) となる。なお、同書のブラジル・ポルトガル語からの英語翻訳版をみると、この箇所には *Mutato nomine de te fabula narratu* (Change but the name and of you the tale is told), Horace (Satires I.) 「名前さえ変えれば、汝の話が語られる」という注釈が加えられている。Vilém Flusser *Vilém Flusser's Brazilian Vampyrotheuthis Infernalis*, New York/Dresden 2011, p.28.
- 5) Rodrigo Maltez Novaes, Notes on the translation, in: Flusser, *Vilém Flusser's Brazilian Vampyrotheuthis Infernalis*, a.a.O., S. 16.
- 6) Ibid.
- 7) フルッサー著作の発行年に関しては、2015年に刊行された『フルッセルアーナ』(フルッサー辞典)に依拠する。Siegfried Zielinski and Peter Weibel with Daniel Irrgang, editors, *Flusseriana – An Intellectual Toolbox (English/German/Portuguese)*, University of Minnesota Press 2015, S.525.

- 8) Rodrigo Maltez Novaes, Translator's Introduction, in: Vilém Flusser, *Post-History*, Minneapolis 2013, S. XIV.
- 9) Vilém Flusser, *Post-History*, Minneapolis 2013, S.166.
- 10) Flusser, *Post-History*, a.a.O., S.167.
- 11) Flusser, *Post-History*, a.a.O., S.166-167.
- 12) Siegfried Zielinski and Peter Weibel with Daniel Irrgang, editors, *Flusseriana – An Intellectual Toolbox (English/German/Portuguese)*, a.a.O., S.501.
- 13) Novaes, Translator's Introduction, in: Flusser, *Post-History*, a.a.O., S.X-XI. これに関しては、考察者自身も、ベルリン芸術大学にあるフルッサー・アルヒーフに直接赴いた折、上記タイプ原稿の存在を確認している。
- 14) Vilém Flusser, *Nachgeschichte – Eine korrigierte Geschichtsschreibung*, Frankfurt am Main 1997, S.127f.
- 15) Flusser, *Post-History*, a.a.O., S.166.
- 16) Flusser, *Nachgeschichte – Eine korrigierte Geschichtsschreibung*, a.a.O., S.128.
- 17) Ibid.
- 18) Arno Schmidt, *Seelandschaft mit Pocahontas*, Frankfurt am Main 1959/1966/2008, S.127f.
- 19) 「ヘクトコテュルス」Hektokotylus/Hektocotylus については、すでに過去の拙論『脱肉体化時代の官能的思索－ヴィレム・フルッサー論考(3)－』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科言語文化論集 第37巻 第1号(2015) 15－30頁）のなかで言及したロジェ・カイヨワの著書『蛸』のなかでも触れられている。カイヨワは、頭足類がもつ「ヘクトコテュルス」という生殖形体についての知識を、19世紀イギリスの海洋科学者ヘンリー・リーの著書『蛸－フィクションと事実からなる〈地獄の魚〉』からえたとしている。Roger Caillois, *Der Krake - Versuch über die Logik des Imaginativen*, München 1986, S.199f. ロジェ・カイヨワ著、塚崎幹夫訳、『蛸－想像の世界を支配する論理を探る』、中央公論社、1975年、129-130頁参照。Henry Lee, *The Octopus; or, The "Devil-Fish" of Fiction and of Fact*, London 1875, S.49, S.65. この本のなかでリーは、hektocotylus とならんで、hectocotylized という動詞ももちいている。
- 20) ギリシア神話に登場するアルゴ船 die Argo の乗組員 nauta からとった学名。
- 21) Klaus Theweleit, "You Give Me Fever": Arno Schmidt. *Seelandschaft mit Pocahontas. Die Sexualität schreiben nach WW II*, Frankfurt am Main 1999, S.93.
- 22) Theweleit, a.a.O., S.172.
- 23) Flusser, *Vilém Flusser's Brazilian Vampyroteuthis Infernalis*, a.a.O., S.75.
- 24) Flusser / Bec, a.a.O., S.22f.
- 25) Roger Caillois, *Der Krake - Versuch über die Logik des Imaginativen*, München 1986, S.138.
- 26) この点については、すでに下記の拙論でも詳細に論じた。越智和弘『脱肉体化時代の官能的思索－ヴィレム・フルッサー論考(3)－』、名古屋大学大学院国際言語文化研究科言語文化論集 第37巻 第1号(2015)、15-30頁。
- 27) Zielinski /Weibel with Daniel Irrgang, editors, a.a.O., S.497.
- 28) Zielinski /Weibel with Daniel Irrgang, editors, a.a.O., S.499.
- 29)すでにフルッサーは、1957/58年に *Die Geschichte des Teufels* のドイツ語原稿を完成させていおり（ドイツで刊行されたのは、1993年）、そのしばらく後に、ポルトガル語版 *A História do*

- Diabo* を脱稿している（刊行は、1965年）。Zielinski /Weibel with Daniel Irrgang, editors, a.a.O., S.463.
- 30) Vilém Flusser, *Die Geschichte des Teufels*, Göttingen 1993/2006, S.36.
 - 31) Ibid.
 - 32) 「けだし、驚異することによって人間は、今日でもそうであるが、あの最初の場合にもあのよう
に、知恵を愛求し（フィロソフエイン）〔哲学し〕始めたのである」アリストテレス、出隆訳、
『形而上学（上）』、岩波文庫、2002年、28頁。
 - 33) Martin Heidegger, *Der Ursprung des Kunstwerkes*, Frankfurt am Main 1950/2012, S.9. ハイデッ
ガー、関口浩訳、『芸術作品の根源』、平凡社、2002/2006年、21頁参照。
 - 34) Daniel Irrgang, Die Briefe zwischen Vilém Flusser und Felix Philipp Ingold, 1981-1990, in: *Flusser
Studies* 20, S.2. [www.flusserstudies.net/sites/www.flusserstudies.net/files/media/attachments/briefe-
zwischen-flusser-und-ingold.pdf](http://www.flusserstudies.net/sites/www.flusserstudies.net/files/media/attachments/briefe-zwischen-flusser-und-ingold.pdf)
 - 35) Ibid.
 - 36) Flusser an Ingold, 20. September 1981, aus: Irrgang, a.a.O., S.4.
 - 37) Flusser an Ingold, 12. Januar 1986, aus: Irrgang, a.a.O., S.4.
 - 38) "die Form der 'Fabel' als literarischen Stil weiter auszubauen", aus: Irrgang, a.a.O., S.4.
 - 39) "We are in this sense doubly negative, open for love, which *omnia vincit* " in: Flusser, *Post-History*,
a.a.O., S.166.
 - 40) Vilém Flusser, *Briefe an Alex Bloch*, Göttingen 2000, S.121ff.
 - 41) Flusser, *Briefe an Alex Bloch*, a.a.O., S.125ff.
 - 42) Flusser, *Briefe an Alex Bloch*, a.a.O., S.138ff.
 - 43) Flusser, *Post-History*, a.a.O., S.167.

